「職分的代示と現代論理学」

渋谷克美

(一) 序論

中世は、一般に暗黒時代と言われる。ギリシャの古代と、デカルト・カントらの近世との間の過渡期として語られるのが通例となってきた。論理学の方面においても例外ではなく、カントが「純粋理性批判」の中で「論理学はアリストテレス以来一歩も進歩していない。」と評したことは有名である。

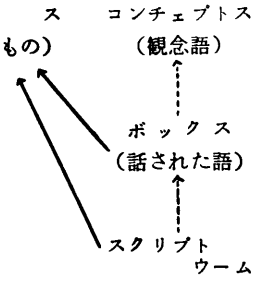
しかし近年、中世論理学を再評価しようとする動きがでてきた。中世のいわゆるスンマ・ロギカエ（論理学大全）の写本を活字にする仕事が少しずつ成果をあげつつあるのが現状である。

中世論理学は、アリストテレスの範疇論、命題論、ポリフェリオスのイサゴゲーのみが研究の対象となったロギカ、ヴェトウス、十二―十三世紀のアラビアを経由してのアリストテレスの他の著作の流入によるロギカ・ノヴァ、十四世紀のアリストテレス論理学とは別の発展をみせるロギカ・モデルナに三分される。特にロギカ・モデルナはプロプリタース・テルミノルーム（名辞の固有性）の分野で独自の展開をみせ、現代論理学の観点からも注目に価する。当論文で扱うウイリアム・オッカム（一二八〇―一三四九）は、このロギカ・モデルナに属する論理学者であり、彼のスンマ・ロギカエは中世論理学の集大成した論理学書である。

筆者は、このスンマ・ロギカエで述べられたスポジチオ・ペルソナーリス（職分的代示）についてベエーナーが「現代論理学の量化理論の萌芽がみられる」とした説をとりあげる。

(二) スポチオの説明

オッカムは、スポジチオ論に先立つスグニフィカチオ（表示）論において、テルミヌス（名辞）をコンチェプトス（観念語）とボックス（話された語）とスクリプタ（書かれた語）に三分する。この三者の関係は、つぎのように図式される。



実線はスグニフィカチオを示す。
点線はスブオルディノを示す。

このスグニフィカチオ論を基礎にして、オッカムはスポジチオ（代示）を説明する。「スポジチオとは、いわば他のもののかわりにおくことである。名前が命題の中に他のもののかわりにある、すなわち我々があるもののかわりに名前を用い、その名辞（あるいは、斜格であるならばその正格）がそのあるもの（あるいはそのあるもの

を指示する代名詞）について真とされる時、あるものをスポジチオ（代示）するという。そして、このことはスポジチオしている名辞がスグニフィカチオする働きをすると解される時少くとも真である。」（論理学大全、第一部六四節）

㈢ スポジチオの分類

スポジチオは、三つに分類される。㈠スポジチオ・ペルソナーリス（職分的代示）は、命題の主語あるいは述語がそれのスグニフィカチオ（表示）しているもの（レス）をスポジチオ（代示）する。すなわちあるもの（レス）をスグニフィカチオする働きをすると理解される場合である。例えば、「ソクラテスは人間である。」という命題の中の名前「ソクラテス」、「人間」はあるもの（レス）、人間の代わりに命題の中に入る記号（シグヌーム）である。㈡スポホチオ・シンプレックス（単純代示）は、名前があるもの（レス）をスグニフィカチオする働きをすると理解されるのではなく、魂の懐抱（インテンチオ）をスポジチオする場合である。例えば、「人間は種である。」という命題の中の名前「種」は我々の精神の抱く懐抱・観念の代わりに命題の中に入る記号である。㈢スポジチオ・マテリアーリス（素材代示）は、あるもの（レス）をスグニフィカチオする働きをするのではなく、ボックス（話された語）やスクリプトウーム（書かれた語）をスポジチオする場合である。例えば、「人間は話された名前である。」という命題の中の名前「人間」、「話された名前」は話された文字の代わりに命題の中に入る記号である。

この巧妙なスポジチオ論の故に、オッカムは次のような三段論法の成立を認めない。「ソクラテスは人間である。」「人間は種である。」故に「ソクラテスは種である。」成立しないとした理由は、大前提の命題の名前「人間」はスポジチオ・ペルソナーリスであるのに、小前提の命題の名前「人間」はスポジチオ・シンプレックスであるからである。

このスポジチオの三つの分類の中で、スポジチオ・ペルソナーリスが、そのあるもの（レス）をスグニフィカチオする働きの故に、最っとも重要と考えられた。ペルソナとは仮面をつけて役者が演ずることを言うのだそうで、名古屋大学・大鹿先生は「職分的代示」という訳をつけておられる。

㈣ ベェーナーの説

オッカムはスポジチオ・ペルソナーリスを説明する際、次の論理操作を述べた。「スポジチオ・ペルソナーリス・デェテルミナータは、ある選言によって単称命題へと下降する（デスケンド）場合である。例えば「人間は走る。」それ故、「この人間は走る。」あるいは「あの人間は走る。」あるいは・・・は妥当な推論である。」（論理学大全・第一部・七〇節）

このオッカムの論理的「デスケンド」の操作をベェーナーは、「中世論理学」の中で次の量化理論の操作と同じものだとする。

特称記号（X）（Xは人間であり、かつXは走る）≡（x_1は人間であり、かつx_1は走る）選言記号（x_2は人間であり、かつx_2は走る）選言記号・・・

あるいはオッカムは次の論理的「デスケンド」の操作も述べる。「スポジチオ・コンフーサ・ディストリィビューティバは、ある仕方で連言的に下降する（デスケンド）場合である。「すべての人間は動物である。」という命題の主語はスポジチオ・コンフーサ・ディストリィビューティバであるのだから、「すべての人間は動物である。」それ故「この人間は動物である。」かつ「あの人間は動物である。」かつ・・・は妥当な推論である。」（同じ個所の引用による）

この論理的「デスケンド」の操作をベェーナーは次の量化理論の操作と同じものだとする。

全称記号（X）（Xが人間であるならば、Xは動物である）≡（x_1が人間であるならば、x_1は動物である）連言記号（x_2が人間であるならば、x_2は動物である）連言記号・・・

(五) ベェーナーの説へのガーレス・マシュウの反論

このベェーナーの説に対して、ガーレス・マシュウはつぎの反論を提出する。「現代論理学は変項に量化をおこなうのに、オッカムは名前に量化をおこなっている。したがって、オッカムと現代論理学とは定言命題の解釈において一致しない。」（ソイロソフィカル・レヴュー一九六四）

このガーレスの反論を裏づけるものとしては、現代論理学者のギーチの「表示と一般性」の中でのオッカムのスポジチオ・ペルソナーリスとラッセルの初期の著作である「数学の原理」のデェノーティングとの類似の指摘がある。ラッセルはこの時期には未だ「記述理論」の構想を持っていなかった。このラッセルの「記述理論」によれば、変項の位置を占めることができるのは指示対象を持つ個別の名前（プロパー・ネイム）に限られる。「人」「馬」といった一般の名前は指示対象を持たない。したがって変項の位置を占めることができない。このラッセルの理論の利点は、「キマエラ」や「ユニコーン」らの名前が指示対象を持たないこと、すなわちキマエラ、ユニコーンといった空想上の怪物の存在を認めなくてすむことである。

ガーレス・ギーチのベェーナーの説への反論は、現代論理学においては変項・すなわちただひとつの指示対象を持つ個別の名前に量化するのに、中世論理学においてはそのような制限なしに、名前に量化をおこなう。したがって、空想上の怪物の存在を認めざるをえないのではないかということに要約できる。

しかし、筆者が考えるに、この反論はあたらない。オッカムが論理的「デスケント」の操作を説くのは、つねにスポジチオ・ペルソナーリスにおいてである。そして、ある命題がスポジチオ・ペルソナーリスであることは、その命題の中の名前はつねにあるもの（レ

ス）をスグニフィカチオする・すなわち指示対象を持つと定義された。したがって、現代論理学における制限と同様の制限が中世論理学においてもなされていた。空想上の名前「キマエラ」が中に入る命題、例えば「キマエラは動物である。」は、スポジチオ・ペルソナーリスではなく、スポジチオ・シンプレックスの命題である。スポジチオ・シンプレックスの命題の名前は、精神の抱く懐抱・観念の代わりに命題の中に入るのだから、空想上の怪物の存在を認めなくともよい。

このオッカムの名前を中心にした論理学と類似した論理学に、ポーランドの論理学者レスニウスキーの「オントロギー」がある。レスニウスキーは、名前をただひとつの対象を表わす名前（アンシェアード・ネイム、ラッセル流の論理学では変項の位置を占めうる名前）といくつかの対象があつまってできていることを表わす名前（シェアードネイム）、怪物のように存在しない対象を表わす名前（フィクティアス・ネイム）にわける。